ECOMUSE

資料館だより

NO.63
2018年
2月号

過去と未来がひびきあう
ーようこそ、エコミューズへ。
www.aozora.or.jp/shiryou/

あおぞら財団付属
西淀川・公害と環境資料館
エコミューズ

特報　やかた館訪問記

チェルノブイリ原発事故資料室（ホイニキ郷土博物館内）ベラルーシ共和国ゴメリ州ホイニキ市

1986年4月26日に、チェルノブイリ原発事故が起きました。チェルノブイリ原発はウクライナにあります。しかし、汚染物質の7割は隣国のベラルーシに降り注ぎました。ベラルーシのホイニキ地域が多くの被害を受けました。ホイニキ地区にある「ポレシエ国立放射線・生態保護区」は高濃度汚染地で、その地にあった村々は廃村となり、多くの住民が移住することとなりました。

今回、原発事故から30年たったベラルーシで、どのように原発事故に向き合い、経験を伝えているか、埼玉大学の安藤聡彦先生の聞き取り調査に同行させてもらいました。

ホイニキの中にある郷土博物館の一室は、チェルノブイリ原発事故によって奔走させられたホイニキの人々の記録が保存され、チェルノブイリ展示室が形成されています。その記録は、事故の処理を直接行い亡くなった人たち、行政処理の担当者の執務机、甲状腺の被害、避難させられた人たちの写真やソファー、汚染値や人口の変化、ポレシエ国立放射線・生態保護区で回復した自然、チェルノブイリ原発にまつわる文学作品の紹介などです。

手作り感あふれる資料館で、現物がたくさん置いてあります。資料室の天井には、廃村になった村々の名前が記されたプレートがぶら下がっています。そこから、当時の困難、この地域が乗り越えてきた悲しみなどを、そのまま感じることができました。悲劇性をことさら強調するわけではなく、事実を淡々と述べる資料館の姿勢に、同じ公害地域の資料館として共感することが多かったです。ウクライナ側にも資料館があるそうなので、機会があればぜひ行ってみたいです。

（林美帆）

～ 公害教育と人権教育の交流を深める ～ 公害資料館連携フォーラムin大阪を開催しました

フォーラム全体会の様子

昨年12月15日～17日、「第5回公害資料館連携フォーラムin大阪」を開催しました。2013年から新潟・富山・四日市・水俣で開催し、満を持してあおぞら財団のある大阪での開催です。

15日のフィールドワークは、西淀川だけでなく、尼崎市立地域研究史料館および尼崎南部再生研究室にご案内いただき、尼崎コースも設けました。かつての公害の状況と患者さんのお話、現在の対策と地域再生のまちづくりについて学びました。16日～17日は大阪市立大学で開催しました。基調講演は京都外国語大学の東自由里さんから、アウシュビッツや9・11などに関連する「負の遺産」と記憶をつなげる展示や教育プログラムについてご報告いただき、公害の経験を伝える際　の示唆をいただきました。

分科会は6つ開催しました。今回は人権教育の活発な大阪でその蓄積から学ぶ企画として「公害と差別を考える」「語り部からの学びを深める」と題した分科会を開催しました。よく「公害についての正しい理解が差別をなくす」と言われますが、ただ情報を伝えるだけでは学習者にとって自分事の学びにならず、差別をなくすまでに至らないことがあります。学習者自身が問題を自分事として捉えるための人権教育の実践は参加者に大きな刺激となったようです。その他、「公害入門」「公害資料の活用」「地域づくり」「企業」の分科会では西淀川の蓄積を踏まえた企画としました。詳しくは3月末発行・発売予定の報告書をご覧ください。

（栗本知子）